

屏東縣竹田郷～心をつなぐ図書館～

交流協会高雄事務所 所長 野中 薫

東日本大震災の悲劇に世界中の国々が支援してくれました。中でも、台湾人による真心のこもった支援の数々は、日本国民に勇気と感動を与え、日台双方で沸き起こった「日本加油」、「謝謝台湾」の大合唱は、日台の深い友情を示すものとして、今も心に深く刻み込まれています。

2011年の「今年の漢字」に「絆」の一文字が選ばれたのも、大震災を通じて、多くの人々が家族や身近なかけがいのない人との絆の大切さを再認識した結果だと思えます。

今回は、台湾南部に息づく日本と台湾を結ぶ心の絆、「池上一郎博士文庫（通称、竹田文庫）」という小さな図書館をご紹介します。

文庫に名を残す故池上一郎博士は太平洋戦争中、高雄市の東に位置する屏東縣竹田の野戦病院に院長として赴任し、米軍の空襲で傷ついた村民を軍人と分け隔てなく治療するなど、その温かな人柄は現地の人々から深く慕われていました。竹田滞在は1943年から終戦までのわずか2年足らずでしたが、池上氏はここを第二の故郷と思い定め、帰国後、日本語を話し、日本人として暮らした台湾人のために自らの蔵書を寄贈しました。これが、竹田駅に隣接する文庫誕生のきっかけとなりました。当時、竹田駅は合理化で無人化され、大正時代に建てられた日本式木造駅舎は取り壊しが決まっていたのですが、地元住民の熱心な保存運動の結果、駅舎は古跡として保存され、池上氏寄贈の書籍はかつての鉄道倉庫を改築した図書室に収蔵されることとなりました。

2001年、池上博士の誕生日に合わせて1月16日に文庫設立の式典が開催されましたが、池上氏はすでに高齢のため出席は叶わず、人々は式典の模様をビデオに収め、博士の元に送ったそうです。

池上氏は熱心に何度も繰り返しその様子に見入っていたが、それから2か月後に、九十歳の生涯を閉じました。毎年、1月に開かれる周年式典では、日本時代を懐かしむ年配の会員たちが大きな声で歌う軍歌や唱歌を今でも聞くことができます。

現在、文庫の会員は約150人。運営はすべてボランティアで行われており、毎週のように読書会が開かれています。この文庫の存在を知った人々が日本各地から書籍を寄贈することもあり、蔵書は既に5000冊を超える（当所も日本語図書を寄贈）。文庫の利用者はやはり日本語世代と呼ばれる老人たちが中心ではあるが、屏東縣内には国立大学3校、私立大学4校があり、それぞれが日本語学科を有していることから、最近では学生も姿を見せはじめている。また、文庫の入口には「世界最南端の日本語図書館」と大書されており、台湾人のみならず日本人旅行者もわざわざ列車に揺られて、この文庫を訪れるという。

池上氏によって日本と台湾の間に蒔かれた一粒の種子は、この地に根付き、人々を癒している。文庫完成後、まもなく他界した池上氏だが、文庫が今も日本を愛する人々の憩いの場所としてありつづける様子を、きっと眼を細くしながら見守っているに違いない。

烏山頭水庫を設計・建築した八田與一技師ほど有名ではないかも知れないが、池上一郎博士もまたしっかりと台湾の人々の心に生き残っている。南部台湾人は自らを「人情味に厚い」と誇らしげに語るが、南部各地にはこうした日本と台湾の「人と人との心の絆」を物語るエピソードが数多く存在しており、東日本大震災に際して台湾国内に沸き起こった我々の想像をはるかに超える真心の支援というものも決して偶発的なものではなく、多

くの先人の功績とそれを守り抜いている人々の努力のお蔭であると強く実感しています。

私も毎年の周年祭出席をはじめ様々な機会に竹田を訪れ、関係者との交流を深めておりますが、

今後とも文庫保存に献身的な人々に寄り添いながら、彼らの活動を見守っていきたいと考えております。